



読みの活性化が読むことの指導に与える可能性：
ファシリテーション・グラフィックの活用を基に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-04-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 峰本, 義明 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00008665

読みの活性化が読むことの指導に与える可能性

——ファシリテーション・シミュレーション・グラフィックの活用を基に——

新潟県立新潟高等学校

峰本 義明

一 問題の所在

国語科における指導を促進させるためには、生徒同士が話し合いをして自らの意見を交流する活動が欠かせない。現行の高等学校学習指導要領国語の「現代文」における「内容の取扱い」では、次のように示されている。¹

イ 文学的な文章を読んで、人物の生き方やその表現の仕方などについて話し合うこと。

このことは、平成二十一年三月例示の高等学校学習指導要領の「現代文B」においてもほぼ同様である。したがって、国語科指導では生徒同士が話し合い活動を行うことよって、自らの意見を交流して読みを深める活動が重要である。

これを受けて、国語科指導において生徒同士の話し合い活動は多く行われている。だが、高等学校段階では話し合い活動の頻度は小・中学校段階よりも著しく減少していると思われる。だが、少ないながらも、話し合い活動は高等学校においてもある程度行われている。

話し合い活動にはクラス全員が参加する話し合いと小集団による話し合いとの二種類を考へることができる。全員参加の話し合いについては別の機会に譲るとして、本稿では小集団による話し合

¹ 文部省告示『高等学校学習指導要領』平成十一年三月

いにおける可能性を探ることとする。

さて、実際に生徒に小集団を組ませて話し合い活動をさせると、様々な問題が出現してきて、結果としてうまくいかないことがよく起こる。それらの問題は、例えば次のことが挙げられるだろう。

- 一 生徒から意見が出ず、すぐに沈黙してしまう。
- 二 見た目は活発に話し合っているが、内容は文章に関わることでなく、話が脱線したまま進んでいる。
- 三 一人が意見を述べると、他の者がそれにすぐ同調してしまい、意見が発展していかない。

こうした不活発な話し合いを活性化し、生徒が自らの意見を他の生徒と交流させて、自らの意見を再確認したり、新たに意見を再構築したりするような話し合いの授業はどのようにしたら実現できるのだろうか。また、そうした活発な話し合いの授業は生徒自身の読むことの能力をどのように伸張させるのだろうか。これらの問題意識が本稿の出発点である。

二 話し合いの活性化に向けて

話し合いの問題は、実は一般的な会議で起こる問題と同じものである。一般的な会議での問題は次のようなものが挙げられる。こ

れは「失敗した話し合いの典型的な症状」として紹介されている。²⁾

1 意見が出ない

しらくムードがただよっており、意見があっても出さうとしない。出せば批判や攻撃が飛んでくる。いつも発言する人が決まっており、発言しない人も少なくない。結局、目上の人が長々と演説するのを、ひたすら拝聴させられ、会議が終わってからホンネの意見が出てくる。

2 意見がかみ合わない

筋の通らない意見や意味不明の意見が平気でまかり通る。思いつきや脱線ばかりで、話があちこちに飛んでしまう。論点が明確でなく、議論がかみ合っていないことが多い。しかも、全員がバラバラにメモを取っているので、いつまでやつても意識や解釈が一致しない。

3 意見がまとまらない

同じ主張を繰り返すだけの水掛け論になり、議論がぐるぐる回る。意見の食い違いが個人攻撃にすりかわってしまい、説得と言いつの場になり、創造的な合意形

²⁾ 堀公俊・加藤彰『フアシリテーション・グラフィック 議論を「見える化」する技法』二〇〇六年・日本経済新聞社・二二頁

成にならない。最後には、結論が曖昧なまま終わってしまい、時間をかけた割には何が決まったのかよく分らない。

これらの一般的な会議における問題点は、授業場面に置き換えてみても十分当てはまることが分かる。先に挙げた授業場面における三つの問題点の例は、ここでの一般的な会議での問題点とちよほど対応する。他にも、一般的な会議での問題点で挙げられていることは、授業場面でも出現する。

それならば、一般的な会議における話し合いを活性化させる方法は授業場面でも有効なのではないだろうか。そして、その活性化させる方法を授業場面で活用することによって、生徒同士の話し合いが進み、学習自体も進展することが期待できる。

三 ファシリテーション・グラフィックの活用

昨今では教師主体の授業から、生徒が自ら考え、仲間と協力して学んでいく、生徒主体の授業の手法が増えてきている。そうした中で注目されているのが「ファシリテーション」という考え方である。

「ファシリテーション」とは何か。日本ファシリテーション協会^②のウェブページには「ファシリテーションとは」と題して、以下の説明が記

されている。^③

ファシリテーション (facilitation) とは、「促進する」「容易にする」「円滑にする」「スムーズに運ばせる」というのが原意です。人々の活動が容易にできるよう支援し、うまくことが運ぶよう舵取りするのがファシリテーションです。具体的には、集団による問題解決、アイデア創造、合意形成、教育・学習、変革、自己表現・成長など、あらゆる知的創造活動を支援し促進していく働きを意味します。

このような考え方に立ち、話し合い活動においても話し合いをスムーズに運ばせるためのスキルが開発されている。それが「ファシリテーション・グラフィック」である。

ファシリテーション・グラフィックとは「議論の内容を、ホワイトボードや模造紙などに文字や図形を使って分かりやすく表現」^④することである。このファシリテーション・グラフィックには次のような

② 日本ファシリテーション協会

https://www.faj.or.jp/modules/index.php?content_id=23

2012.2.29 閲覧

④ 堀公俊・加藤彰『ファシリテーション・グラフィック 議論を「見える化」する技法』二〇〇六年・日本経済新聞社、一八頁

メリットがある。⁵

1 プロセス共有

- ① 議論のポイントを分かりやすくする
 - ② ポイントに意識を集中させる
 - ③ 共通の記録として残す
- #### 2 参加の促進

- ① 発言を定着させて安心感を与える
- ② 発言を発言者から切りはなす
- ③ 議論に広がりを与える

このファシリテーション・グラフィックを授業場面での生徒同士の話し合いに活用することで、沈黙しがちな話し合いを活性化させる効果が期待できる。

四 授業構想

(一) 教材

生徒同士の話し合いによって読みを深めていく授業を構想する

堀公俊・加藤彰『ファシリテーション・グラフィック 議論を「見える化」する技法』二〇〇六年・日本経済新聞社・二二頁

際に、扱う教材は小説教材がふさわしい。

筆者は今年度、高等学校の二年生を担当している。そこで、高校二年生での小説教材の定番である夏目漱石の『こころ』を読む際に、ファシリテーション・グラフィックを活用した授業を試みた。

なお、筆者の勤務校が用いている教科書は明治書院の『新精選現代文1』である。この教科書では『こころ』の「下 先生と遺書」中の三五章の途中から四八章までを収録している。これは、「K」が「私」の部屋に入ってきて、「お嬢さん」への恋を打ち明ける場面から始まり、「私」が「K」が自殺しているのを発見する場面で終わることになる。

(二) 対象生徒・期間

対象生徒はN県立N高等学校二年生の一六〇名である。その内訳は文系一クラス(二六名)・理系二クラス(四四名ずつ)・理数科一クラス(二六名)である。

指導機関は二〇一一年一〇月～十一月、指導時数は各クラス一〇時間、または一一時間であった。なお、筆者の勤務校は六五分授業を採用しており、授業一コマは六五分である。

(三) 指導計画

今回の実践では、生徒の自由な発想での議論を促すために、教師による解説をまだ始めていない最初の段階で話し合いの授業を展開した。そして、生徒同士が話し合い活動によって自由に意見を

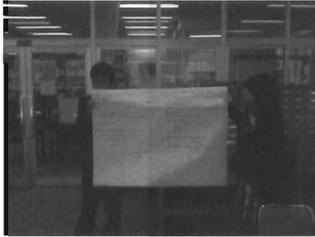
資料三 話し合いのテーママ提示プリント例

き、そこでの話し合いの内容について取材してくる。残った
 司会は、自分たちのグループの話し合いの内容を模造紙に
 書かれた記録を基に伝える。

③ 一〇分後、再び元のグループに戻り、戻った三人は取材
 してきた他のグループの話し合いの内容を伝える。そして、
 新たな情報があれば青のマジックペンで模造紙に書き足す。
 その後、自分たちのグループのまとめを赤のマジックペンで
 書くか、印を付ける。

④ 各グループの話し合いの内容をクラス全員に発表する。
 司会が中心になって発表し、他のメンバーは模造紙を全員
 に示す。

この四サイクルを話し合いの三時間中は繰り返し続けた。左上はグル
 ープで話し合う様子、左下は全体への発表の様子である。



グループ作業「ここぞ」の謎に迫る②

1 話し合いのテーマ

Kが自殺すべきだった時期はいったいどうだろうか？

教科書一六ページ下にはこのようにある。

「私の最も痛切に感じたのは、最後に墨の傘を借りて書き添えたりして見せる、
 もっと早く死ぬべきなのに今まで生きていたのだという意味の文
 句でした。」

とすると、Kは「もっと早く死ぬべきだったと考えている。では、それは
 いつのことだろうか？」

〔参考〕「私」は教科書掲載分の後、しばらく経ってからこう考えている。

「同時に私はKの死因を繰り返し繰り返し考えたのです。その当座は肩が
 ただ窓の一字で支配されていたせいでもありません。私の観察はむ
 しろ簡単でも直線的でした。Kはまさしく失恋のために死んだもの
 とすぐ決めてしまったのです。しかしだんだん落ち着いた気分が、同じ
 現象に向ってみると、そうたやすくは解決が着かないように思われて来
 ました。現実と理想の衝突、——それでもまだ不十分でした。私はしま
 いにKが私のようにたった一人で淋しくって仕方がなくなりました。私はしま
 いに解決したのではなからうかと願い出しました。そうしてまたぞつし
 たのです。私もKの歩いた路を、Kと同じように辿っているのだという
 予感が、折々風のように私の胸を横通り始めたからです。」
 (『先生と遺書』第五十二回)

これを踏まえると、Kの自殺した理由・自殺を考え始めた時期をどう考え
 たらよいか？

2 話し合いの目標

全員が、Kが自殺を考え始めた最初の箇所を特定し、
 Kの自殺の理由を再考する

五 今後の課題

本稿ではファシリテーション・グラフィックを活用した話し合いの授業の様子を伝えることを第一の目的とした。この授業の分析とファシリテーション・グラフィックによる話し合いが読むことの指導にどのような効果を与えたのかは別稿としたい。

ただ、生徒へのアンケート結果を見ると、ファシリテーション・グラフィックを用いたことで話し合い自体は活性化しただけで、この実践の前後に行った読解方略に関する自己評価を比較することで、今回の実践が生徒の読解方略の獲得についての意識をどう変化させたかを分析することができると考えている。

筆者が今年度行った授業全般について行ったアンケートによれば、生徒はこのファシリテーション・グラフィックを用いた授業について高い評価をしている。他の形態による話し合いの授業よりも高い評価である。ファシリテーション・グラフィックが議論を「見える化」することで生じるメリットである「プロセス共有」「参加の促進」が、やはり授業場面でも生きているのだろうと考えられる。

今後このファシリテーション・グラフィックを活用して生徒の話し合いを活性化させ、そのことで生徒の読むことの能力がどのように育成されていくのか、調査していきたい。